



2020 年 (令和 2 年)
3 月号 (No. 898)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

ぼくの心にはいつも山があり、 東京には「超低山」があった

『お江戸超低山さんぽ』や『東京まちなか超低山』の著者であるイラストレーターの中村みつをさんは、実は本会の会員。青春時代、クライミングに情熱を燃やした「厳しい山」と、氏の描く世界にも通じる「優しい山」といつも向き合ってきた。そのような心の軌跡とともに、「超低山さんぽ」への誘いを綴ってもらった。

中村みつを

あの先には、何があるのだろう

ずっと山が好きだった。思い返すと、山との向き合い方はふたつあったような気がする。「厳しい山と、優しい山」。17歳のときに、同級生と谷川岳・一ノ倉沢衝立岩を登ったのが、ことの始まりかもしれない。

本番の岩場は、夏休みに登攀した北岳・バットレス第4尾根だけ。毎週のように近郊の岩場で練習を

積んだとはいえ、衝立岩は常に壁から振り落とされそうな重圧感との闘いだった。

入門ルートはいくらでもあった。それでも、その圧倒的でピラミダルな岩壁は、群を抜いて魅力的だった。それからというもの、アドレナリンを求めるようにクライミングに没頭した。厳冬期も同様に深みに入っていた。

もうひとつの山、それは絵を描

目次

ぼくの心にはいつも山があり、 東京には「超低山」があった ……	1
今春、2つのヒマラヤ・プロジェクトがスタート ……	4
第9回登山教室指導者養成講習会を 今年も長野県小諸市で開催 ……	6
ホームページ更新のお知らせ ……	8
ライチョウ保護活動へのお誘い ……	9
追悼 中井支部長を偲ぶ ……	10
日下田實先輩を偲んで ……	11
新入会員 ……	12
図書受入報告 ……	12
東西南北 ……	13
図書紹介 ……	15
会務報告 ……	17
ルーム日誌 ……	18
会員異動 ……	18
INFORMATION ……	18
編集後記 ……	19

▶ 日本山岳会事務局 (含図書室) 取扱時間
月・火・木 …… 10~20時
水・金 …… 13~20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 …… 10~18時



く世界にも通じる穏やかな山に心惹かれた。北八ツのような森の山だったり、たおやかなカヤトの尾根だったりする。月夜の下でのんびり過ごすのもいい。少し見方を変えようと、遠くヒマラヤの高地やパタゴニアの山塊が、静かにぼくを興奮させた。

取り立てて運動神経が良いわけでもなく、幼いころから絵を描く

のが好きな少年だった。それが山に目が向いたのは、何気ない会話からだ。中学1年のとき、友人のひとりが「あの山に登れるかな」と西の方に向かって言った。計画はとんとんと進み、奥多摩の川苔山に決定した。映画『スタンド・バイ・ミー』を思わせるような、少年たち6人の初めての山だった。厳しさを求めたわけではないが、選んだコースがすぎ過ぎた。古里から長い赤杭尾根をたどって山頂に立ったぼくたちは、無謀にも蕎粒山、一杯水を経て日原に向かった。案の定、日はとつぷりと暮れ、誰もが無口になっていた。懲りたはずのぼくたちだったが、その4ヶ月後に再び奥多摩に向かった。大岳山から御前山、さらに三頭山。相変わらず強気なプラン



mitsuo

山を経て主峰の箱根山へ。後半は天神山からゴールの新宿富士を指した。

「えっ、それってどこなの？」。ゴールが気になった方は気付かれなかつたかもしれない。

そう、江戸川橋をスタートして、大繁華街新宿までの一本の縦走路を引いてみた。どうせなら大げさに楽しもうと、その名も「山手アルプス」と付けた。

冗談もほどほどにと思われそうだが、もちろん大真面目だ。ここはビルに囲まれた都会のまっただ中、そこを縫うように山々をつないでいく。面白いことに、たどっていくうちに時代を超えて、江戸の町中へタイムスリップするよう不思議な感覚に驚く。

それを実感させたのが、津山藩お抱え絵師の鵜形蕙斎が描いた『江戸一目図屏風』だ。想像で江戸を一望したパノラマで、江戸城を中心に街並みの向こうには富士の姿がひととき大きく描かれている。名所に目を移すと、そこには探

し求めていた都心の名山が勢ぞろい。御殿山や愛宕山、さらに上野の山や、大好きな浅草待乳山もある。江戸庶民に人気の飛鳥山も尾根伝いにあって、ピクニック好きだった江戸っ子の楽しげな姿が目につく。

都会の中に「山の手百名山」と呼ばれたら、次々と山が浮かび上がってきた。そんな小さな山を「超低山」と名付けてみた。ぼくが興味を抱いた超低山は、それこそ「山」と呼ぶには取るに足らないもの。低山と呼ぶにはあまりに小さな山になっていた。

定義をしたら標高は100m以下、比高でいえば50mに満たないものとした。山頂までの高さは平均10mほど、コースタイムで2〜3分というところだ。山の高さだけでなく、その深さなのかもしれない。そんなぼくの山の愉しみのひとつに加わった超低山を『山と溪谷』で連載することになった。今から17年前のことだ。

都会の山を見ていくと「超低山」は大きく3つに分けられた。大名庭園に代表される「築山」。山岳信仰から生まれた「富士塚」と呼ばれるミニチュアの富士山。そして、3

つ目が太古からそこにある「天然の山」となる。

人の手で造られた「築山」は、どうやって生まれたのだろう。徳川幕府が天下を取ると、多くの大名は屋敷に豪華な庭園を設えた。その数は1000とも言われ、江戸市中には壮大な大名庭園が美しさを競った。

伝統的な池泉回遊式の庭園は、どれも似たものと思われがちだが、殿様の好みもあって庭園ごとに趣があった。共通しているのは、大池を掘ったときの残土を盛った築山が造られたこと。築山は庭園に欠かせないランドマークになっていたのだ。

日本の様式に見られる美しく濃密な盆栽や盆景など、「見立て、縮みの文化」が、庭園そして築山に影響しているのが分かる。浜離宮恩賜庭園の富士見山（高さ5m）は富士山を模した縮景であり、山腹のサツキは柵引く雲に見立てたもの。縮景で言えば「富士塚」もそう。

江戸庶民に爆発的に流行った富士信仰からきたものだが、難行苦行の富士登拝は費用も体力も相当なもの。そこで富士講という参拝登山をするための団体を組織し、選

江戸の町中へタイムスリップ

「あの先には、何があるのだろう」いつもこのことがぼくを山へ誘ってくれる。

ある日のこと、椿山から阿弥陀

ばれた代表者が交代で霊峰富士に向かった。

一方、憧れても行けない人のために造られたのが、富士山を模した富士塚。老若男女、誰でも本家の富士に登拝したのと同じご利益が得られるということから、町内に競うようにミニチュアの富士山が造られた。江戸後期には「江戸八百

八講・講中八万人」と呼ばれるほど富士信仰は一大ブームになった。富士塚の高さは10m前後がスタンダード。その数、都内だけでも50以上現存している。ミニ富士には「胎内」と呼ばれた洞穴や、お中道、烏帽子岩、さらに頂には金明水、銀明水に奥宮の祠が置かれ、山肌には黒ボクという富士山の溶岩を貼り付け、懸命に富士に見立てている。登山道には合目石もあり、その気にさせてくれる。



都内最古の千駄ヶ谷富士は、たおやかなコニーデ型で優美に。ごつごつした急峻な岩塊の鉄砲洲富士や、高度感抜群の品川富士もある。

天然の山では、「出世の石段」で有名な愛宕山（標高26m）、花見で人気の飛鳥山（標高25・4m）、そして、浅草に鎮座する待乳

山（標高9・8m）の独立峰3座が並ぶ。都心ともなれば、現存する天然の山はそう多くはない。

高台の崖線に見られる斜面を、山として見立てたのもある。代官山にある西郷山（標高36m）、目白台のおとめ山（標高33m）、東五反田の池田山（標高29m）など。どこも大名屋敷があった所で、今も格の高さは変わらない。

想像力をかき立てる超低山

連載はその後、一冊にまとめられ、2007年に『お江戸超低山さんぽ』（書肆侃侃房）として出版。さらに2018年に出版した『東京まちなか超低山』（ベリかん社）では、東京アルプス、下町アルプス、代官山トレイルなど、想像力を働かせながら楽しい縦走路が出そろった。

「山手アルプス」もそのひとつで、主峰・箱根山を目指すものだ。目白台にそびえる椿山は、結婚式場で知られる椿山荘と聞けば思い当たるだろう。神田川からの登山口は冠木門になる。うれしいことに庭園内は一般開放している。標高28m、高低差は20mほど。けっとうな高さになる。

目白台周辺は南北朝のころから椿が自生する景勝地として「つばきやま」と呼ばれていた。椿山荘の名が付いたのは明治11（1878）年、東京の本邸として元勲・山縣有朋が「つばきやま」を購入し、その名にちなんで命名したもの。

目白台の尾根を離れ、早稲田通りに出ると穴八幡宮が高台に鎮座している。古くは阿弥陀山とも言われ、高低差は10mほどになる。お参りしていこう。

さて、お待ちかねの箱根山は今では戸山公園になっているが、かつて尾張徳川家の下屋敷があった所。広さは東京ドーム9個分ほどと言うから、すごい。山頂には標高44・6mと刻まれた標石板と水準点が設置され、山手線内の最高峰でもある。築山といっても、350年も経つともう立派な天然の山の様相を見せている。

ゴールはもう近い。東新宿に歩を進め路地裏から天神山（標高34m）を経て、ネオン輝く歌舞伎町の一角、新宿の総鎮守・花園神社に向かう。新宿富士は境内の片隅にひっそりあった。かくして、江戸から現代まで超低山の名山をたどった、立派な縦走路となった。

創立120周年記念事業

今春、2つのヒマラヤ・プロジェクトがスタート

グレート・ヒマラヤ・トラバース

20世紀初めには地球上の高峰への挑戦が始まり、1950年になつて人類最初の8000m峰、アンナプルナI峰がフランス隊によつて登られたのを皮切りに、14座の巨峰は1964年までにすべて

登られました。日本山岳会においても、1956年のマナスル初登頂を嚆矢として、グレート・ヒマラヤの峰々に挑戦してきました。ヒマラヤ・ラッシュの時代にあつては1つの頂が登られても、それは挑戦の終焉を意味するものでは

なく、ルートを変え・登り方を変え・シーズンを変え挑戦すべき課題を見出し、これまでに本部や支部が数多くの登山隊を派遣し、幾多の頂を足下にしてきました。

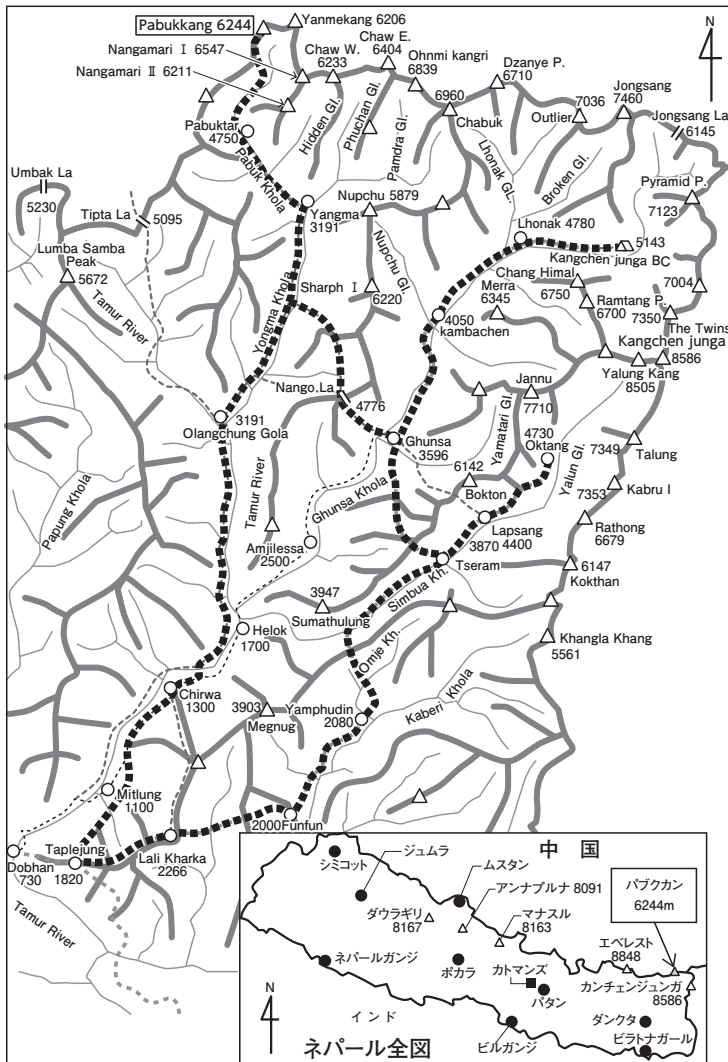
グレート・ヒマラヤ・トラバースは、日本山岳会がこれまでに登つた山々の山麓をたどりながら（カンチエンジュンガからK2までの5000km）、ヒマラヤ地域の変化とこれからの新しいヒマラヤ登山を模索する「温故知新」の旅です。

【調査の目的】

(1) ヒマラヤ地域の变迁調査（初登頂時代との比較と環境変化）

(2) 探検的ヒマラヤ登山による未踏峰・未踏ルート登山（ヒマラヤ登山塾の実施）

(3) 1枚の地図から夢を描き・計画を作り・実行する探検



ネパール全図

的登山を、5000kmにも及ぶ長大なヒマラヤ山脈横断という踏査を通じて次代に伝承する。

【踏査予定】

◆第1期（2020年プレ・モンsoon 22年秋）

20年春Ⅱネパール・ヒマラヤ東端部、カンチエンジュンガBC（オランダ・チン・ゴラ踏破

20年秋Ⅱルンバサンバ山群／クインプ山群／21年春Ⅱロールワリン山群／ジュガル山群／ランタン山群／21年秋Ⅱガネッシュ山群／マナスル山群／アンナプルナ山群

／22年春Ⅱカンジロバ山群／22年秋Ⅱアピ・サイパル山群／インド国内

◆第2期（23年春／24年秋）

◆第3期（25年春・秋）

◆2020年春 行動概要（2月29日～4月21日）

1984年、カンチエンジュンガ縦走（創立80周年記念）と、98年、カンチエンジュンガ北西壁から北稜登山（青年部）のBCを訪問し、チベット国境の未踏峰登山を行なう

カトマンズ→タプレジュン→ゲンサ→カンチエンジュンガBC→ゲンサ→ヤンマ→パブクカン（6244

m)→ヤンマ→オランチュン・ゴラ
↓タブレジュン→カトマンズ

【参加者】

重廣恒夫(79・31、72歳)、松田宏也(117・48、64歳)、吉井修(123・42、58歳)

◆踏査隊の現在地がライブ報告として左記URLで確認できます。

<https://maps.findnespot.com/s/JC3M> または

<https://maps.findnespot.com/Track#panel-history>

(グレート・ヒマラヤ・トラバース
PJリーダー 重廣恒夫)

ヒマラヤ・キャンプ

今の登山の世界には、かつて山岳会や山岳部が担っていた「学びの場」と「コミュニティ」の再構築が必要だと考えます。そのなかでも「学びの場」をつくることは、最重要課題であると捉えています。私は信州大学山岳会に所属していた20歳のときに、初めてのヒマラヤ登山を経験しました。未熟な登山者であった私にチャンスを与えてくれた先輩方がいたからこそ、得難い体験をさせていただくことができました。そして、多くのことを学ぶことができました。

私の同世代までの登山者の多くはこうして先輩に導かれ、経験を積んでいったと思います。しかし、今の日本には、このようなチャンスはほとんどありません。それは山岳会や山岳部の活動が縮小していることに起因します。この問題の解決を目指し、取り組み始めた活動がヒマラヤ・キャンプです。

1回目の2015年は公募せず、母校である信州大学山岳会の後輩たちの中から希望者を募り、6000m峰2座に登頂しました。そして、2回目からはインターネット上で公募し、16年にはロールワリン・カン(6664m)に初登頂、18年にはパンカル・ヒマール(6264m)に初登頂しました。

プロジェクトでは、未踏峰の初登頂を目指しています。なんでも情報が得られる現代において、情報がないことが最高の贅沢であり、登山本来の魅力であると考えられています。通算で4回目、日本山岳会で最初に取り組む山は未踏峰ブンギ(6524m)となりました。アンナプルナ山群の北、ペリ・ヒマールに位置するこの山に、日本山岳会に新たに加わった若者6名と挑戦したいと思います。

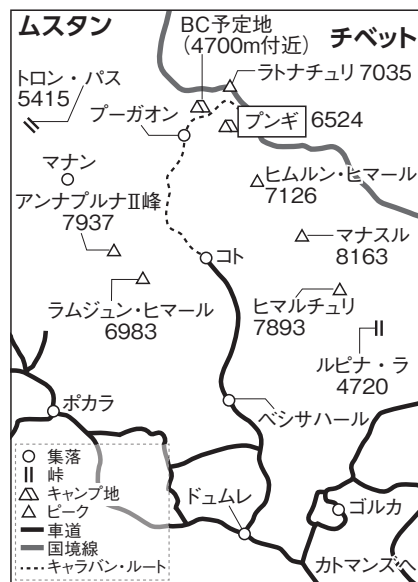
さて、この活動を日本山岳会に移管したことは大きな理由があります。私のミッシェンの一つが「登山文化の継承と発展」です。先輩から山の登り方や哲学のようなものを学び、自分なりにそれを咀嚼して後輩に伝えていく。この当たり前のリレーが途絶え始めていることに危機感があります。登山は温故知新の活動とも言えますので、日本で一番歴史ある日本山岳会こそが取り組むべきプロジェクトだと感じました。また、個人で取り組んでいる以上は、私が活動を中止すると全てが終わります。そうさせないためにも、若手を育成する仕組みづくりをしなければなりません。期せずして今回は創立120周年記念事業という位置付けをいただきました。

したので、毎年のヒマラヤ登山だけでなく、2025年に向けて、海外を目指す若手育成の仕組みづくりにも力を入れたと思います。また、この活動が日本山岳会の基幹事業の一

つとなり、多くの若者を呼び込むような組織になることを願っています。

そのために、公益社団法人たる日本山岳会の役割は非常に重要であります。今後は、海外の未踏峰にチャレンジするすばらしさを、より多くの若者に伝えていかなければなりません。各支部主体で若者を募った報告会を開催するだけでなく、学校や教育団体等との連携も模索できれば、と思っております。私個人では非常に微力ではありますが、皆様のお力とお知恵をお借りして、ヒマラヤ・キャンプに付随する事業にもお力添えをいただけたら幸いです。

(ヒマラヤ・キャンプPJリーダー
花谷泰広)



REPORT

第9回登山教室指導者養成講習会を 今年も長野県小諸市で開催

支部事業委員会 中村哲也

主催…(公社)日本山岳会 支部事業委員会／後援…(公財)安藤スポーツ・食文化振興財団

2月1日(土)

会場…安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター カンファレンス・ホール

◆講義1「事故防止と山岳遭難救助活動」岸本俊朗講師(長野県警察山岳遭難救助隊副隊長)

◆講義2「低体温症・凍傷の基礎知識と対策」植木貞一郎講師(日本山岳会医療委員会委員)

◆講義3「実践セルフ・レスキュー」川瀬恵一講師(日本山岳会遭難対策委員会委員長)

◆講義4「登山教室実施要領」重廣恒夫講師(日本山岳会支部事業委員会)

2月2日(日)

場所…高峰高原・水ノ塔山周辺

◆実技実習「実践セルフ・レスキュー」重廣恒夫講師(前出)、川瀬恵一講師(前出)

2月1日(土)、2日(日)の両日、長野県小諸市において、9回目となる支部事業委員会主催の登山教室指導者養成講習会を開催した。今回も埼玉、千葉、東京多摩、山梨、岐阜、静岡、京都・滋賀、関西、広島、各支部から22名が参加した。年齢は46歳から72歳まで、女性8名、男性14名が集まった。

日本山岳会の活性化・会員増強の方策として、支部山行が準会員や山歴の浅い会員のための定着事業として注目されているが、山行の増加に伴い遭難事故の危険も増加している。また、地域の非会員を対象とした登山教室は新入会員の獲得に寄与することから、実施する支部も年々増えている。非会員を引率する場合には受講者の安全管理はより重要で、山行の安全管理に必要な知識と技術を持った指導者の育成が求められている。そこで、支部事業委員会では登山の安全管理に必要な知識を持つ指導者の養成を通して支部の活性化に資するとともに、各地域において登山者が安全な登山ができるよう指導できる人材の育成を目的として、登山教室指導者養成講習会を実施している。

1日目は4つの講義を実施した。講義1は、近年の山岳遭難事例を基に実際の救助現場の映像を交えて山岳遭難の特徴を説明され、その原因の多くが人的要因によるものであることを示された。また、航空隊での経験から、ヘリで救助される際の留意点の説明もあった。

講義2は、低体温症と凍傷の基礎的な知識から実際の対策まで話され、現場では低体温症は治せない、予防と早期発見により低体温症を起こさないことが重要と示された。

講義3は、ロープ結束法と弱層テスト、雪崩時の対応方法、緊急収容、雪上搬送の講義を行なった後、2日目の実技講習に使用するロープ結束の確認をした。

講義4は、登山教室実施要領と題し、スタッフ業務、講師・リーダーに求められること、事故発生時の対応など、登山教室開催に当たったのノウハウについて具体的な説明がなされた。

2日目はチャーター・バスに乗車して高峰高原に向かう。このころの暖冬で積雪が心配されたが、車坂峠に着くと雪で覆われていたスキー場ゲレンデに隣接した積雪の多い場所に移動し、10名と12名の2班に分かれて重廣講師と川瀬講師の指導の下、講習を行なった。川瀬講師班はアバランチ・トランシーバー(ビーコン)の使用方法を学び、実際に隠されたビーコンを探索し、雪崩埋没者掘り出し法のV字コンベア・ベルト法で掘り出した。次に簡単にできる雪崩弱層テストのハンドテスト法を学んだ。最後にツェルトを使用したビバーク法を習った。



隈研吾氏の設計になる安藤百福センターの全景



V字コンベア・ベルト法で雪崩埋没者を掘り出す訓練

昼食を挟んで班を交代し、午後
に臨んだ。重廣講師班ではロープ
ワークを中心に行なった。まず先
頭を交代しながらラッセルで講習
実施場所まで移動し、次に立木に
スリングとカラビナで支点を構築
し、クローブヒッチでセルフブレ
イを取り、肩がらみで後続者の確
保を行なった。また、悪場の通過
方法として、お互いをロープで結
ぶタイトロップ・システムがある
が、今回そのシステムを実際に行
ない、歩行練習をした。知識だけ
では実際の現場では役に立たない
ので、危険のない場所でも繰り返
し訓練をして、実際に使えるよう
にしておくことが重要である、と講

師より助言があった。

今回の講習会では多くの支部
ら参加があり、安全登山について
学習し、考える貴重な機会を持つ
ことができた。各支部においてセ
ルフ・レスキューや安全登山に対
する取り組みを行なうきっかけと
なり、支部山行や登山教室が適切
な安全管理の下で行なわれること
を願っている。

講習会に参加して

山梨支部 高橋みゆき

「指導者養成講習会」の会場とな
った安藤百福センターは、周囲の
山の木々の中に溶け込むようなデ
ザインの建物であったが、隈研吾
氏の設計というから納得である。
カンファレンス・ホールには壁一
面の大きな窓。そこから黒斑山、浅
間山、水ノ塔山など浅間連峰が一
望である。ひと際真っ白い浅間山
の頂が、我々を迎えてくれた。

1日目は5時間の座学である。
まず山岳遭難救助隊の岸本副隊長
から実際の遭難事例の紹介があり、
救助活動の貴重な映像を見せてい
ただいた。その場に自分がいたら、
どこに危険が潜んでいるか予知で
きるだろうか、どんな行動をとる

べきだろうか、想像しながら事
例検討することができた。

次に低体温症・凍傷の基礎知識
と対策について、医師の植木氏か
らの講義があった。低体温症や凍
傷になる体のメカニズムについて、
非常に明快な内容で理解すること
ができた。特に低体温症は予防と
早期発見により低体温症を起こさ
ないことがいかに大切であるかを
学んだ。

続いてセルフ・レスキューにつ
いて、川瀬氏と重廣氏から実践的
なロープワークや指導者に求めら
れるもの、心構え、事故発生時の
対応マニュアルなどの講義があっ
た。講師陣は皆、経験豊富な方ば
かり、講義の内容が濃くて予定時
間を超過したが、聞き漏らすまい
と集中して聴いていたので、あっ
という間であった。いつの間にか
日はとっぷり暮れており、その後
は食事、懇親会である。関東圏だ
けでなく関西からの参加者もあり、
豊富な山歴をお持ちの方々と楽し
い交流の時を過ごした。

翌日は実技講習である。晴天の
下、バスで車坂峠へ。午前中は雪
崩への対応を学ぶ。講師は昨日、ロ
ープワークを教えてくださった川

瀬氏。昨日、受講生の仲間が雪崩
事故に遭ったというニュースが報
じられていたが、雪崩が身近に潜
んでいるのだ、ということを目に
銘じながらの実践訓練であった。

午後は安全を確保するために、
ロープを結んでのセルフ・レスキ
ュー。講師の重廣氏は日本のヒマ
ラヤ登山に多大な貢献をされ、
数々の経歴をお持ちの方だと聞く
が、その物腰は温厚である。私の
初心者レベルの質問にも、一つ一
つ丁寧に分かりやすい言葉で指導
してくださる。このような講師陣
の態度や言動から、指導者として
のあるべき姿を肌で感じ取ること
ができた。私にとって指導者への
道のりは遠いが、山の魅力を一人
でも多くの人に伝えたい、という
思いはある。いつかその思いを伝
えられるような存在になりたい。
そのための経験を今後も積んでい
きたい。

帰路についた。山々の稜線が茜
色に染まり、くつきりと輪郭を残
して暮れていく。非常に有意義な
2日間であった。講師の方々、ス
タッフの方々、そして、ともに参
加された皆様方に、深く感謝いた
します。

NOTICE

ホームページ更新のお知らせ

デジタルメディア委員会委員長 大塚幸美

4月から当会のホームページをリニューアルします。

①スマホで見られる

パソコンだけでなく、スマートフォンやタブレットからも手軽に利用いただけるようにします。また、HOMEとROOMの2つに分けていた構造を、分かりやすいように一つにまとめます。

②「お知らせ」は一つに

「イベント案内」「お知らせ」「日本山岳会からのお知らせ」「登山関連ニュース」などがありました。が、「お知らせ」一つにし、各グループの投稿もすべて同様に反映させ、使い勝手と分かりやすさの向上を図りました。

③スマホからでも投稿できる

支部や委員会などが記事を掲載するとき、パソコンだけでなくスマートフォンやタブレットからの投稿も可能になります。FacebookなどSNSのシェアボタンも付与しましたので、投稿の拡散も容易です。一般への告知が効率良く行なえます。

④既存のページも移行可能

これまで当会のサイトで作っていた支部独自のページ（ムーバブルタイプ）は、当面、現状のままです。スマホに対応したスタイルに変更も可能で、運用は本年秋季ごろを想定しています。

変更後は独自のページに投稿していた記事を、カテゴリをチェックするだけで垣根を越え、先に述べた「お知らせ」へ投稿が可能



日本山岳会とは

1905年（明治38年）、日本ではじめてできた山岳会です。

東京の本部を中心に33の支部があり、全国におよそ4,800人の会員が在籍しています。

先駆的な登山から、沢登り、ハイキング、山スキー、植物観察、温泉巡りなど、会員それぞれが、さまざまなスタイルで山を楽しんでいます。

2012年に公益社団法人となり、自然保護や障害者支援登山、登山道整備など公益活動も盛んです。

日本山岳会は、山の仲間によって運営する、クラブライフを楽しむ会です。

もっと詳しく >



新しい「TOP」ページ（スマホ画面）

能になり、利便性がさらに向上します。

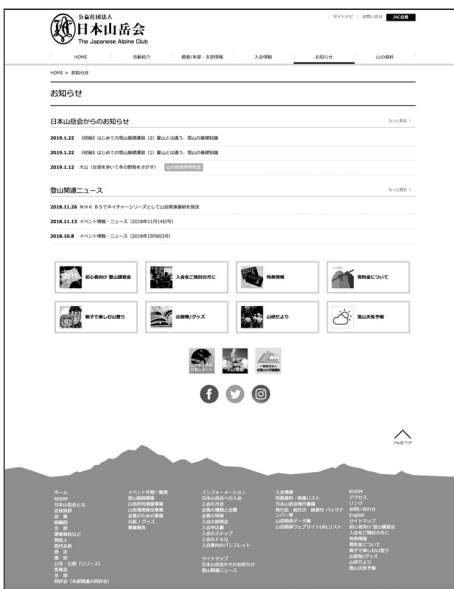
なお、支部、委員会、同好会はHOMEのメニュー「概要／本部・支部情報」からご覧になれます。

◆スマホの個人保有率は多くの世代で増加傾向にあり、20代、30代は90%以上がスマホを保有しています。当会のホームページの閲覧者も7割以上がスマホです。

パソコンサイトの表示をスマホサイトに置き換えるのではなく、スマホユーザーのニーズに対応してWebサイトを構築する「スマホファースト」が、これからは必要です。また、若い会員の獲得と広報につながる期待しております。もちろん、引き続き内容も充実させていきます。お問い合わせは internet@jac.or.jp



新しい「TOP」ページ（パソコン画面）



新しい「お知らせ」ページ（パソコン画面）

RECRUITMENT

ライチョウ保護活動へのお誘い

大森弘一郎

山でライチョウが減ってきており、環境省や多くの有識者が、いろいろと活動していることはご存じです。

疲れて歩いているときに、ふとライチョウが現われて、慰められた経験は多くの方が持ちでしょう。ここ20年ほどの間に6割ぐらいに減りました。その回復のために、我々登山者の力を結集し、お手伝いしませんか。

ライチョウはなぜ減ったのか

(1)温暖化が進んだ——しかし、6000年ぐらい昔の縄文時代に縄文海進という温暖期がありまして。でも、ライチョウは大丈夫でした。温暖化だけのせいにはしたくありません。

(2)登山者が増えた——これは大ありでしょう。踏み荒らしでライチョウの生息域が減ったり、人が持ち込む物で。

(3)下界の病原菌を感染させた——ライチョウは鶏に近い動物ですから、ゆで卵などでライチョウ

にとつて害となる病原菌を持ち込んでいる可能性があります。死んだライチョウから人間の大腸菌が見付かったこともあるそうです。

(4)鹿などがライチョウの生息域に入つて、餌の高山植物を食べた——その後にはフキ科やイネ科の植物が生えているそうです。

(5)捕食動物が増えた——人間が持ち込む食物のせいで、キツネやオコジョ、テンが増えた。子育ての時期がライチョウとちょうど一緒です。平素は肉食で粗食の彼らにとつて、ライチョウの卵や雛は格好のご馳走です。

我々ができることは何か

以上の項目の中にある人間の影響を減らすと今、保護絵はがきを作つて山小屋などで配っています。ライチョウ張り子の募金箱を用意し、そこに入れてもらったお金でまた作るという循環は、まずまず順調です。

00万人の登山者に対してはわずかなものでしょう。もつと山小屋に配りたいと思っています。

そこで、我々登山者自身でもできるお手伝いを考えてみました。

(1)絵はがき歩荷の人手が足りないので、協力してくれませんか——今配っている上高地や立山室堂周辺は私でもできるのですが、高い所は日吉健治会員（自然保護委員会）にお願いしています（会報2019年11月号参照）。

(2)ライチョウの餌場を増やす手伝いをしませんか——お花畑はライチョウの生息環境です、それを増やすことを、まず環境省が実施している「火打山の草刈り」プロジェクトに参加して実績と経験を積み、次はほかの適地でやらせてもらいましょう。

これは、要するに高山植物にとつて邪魔になる草の草刈りです。庭の雑草で試しているのですが、優先させたい草を残して、ほかの草の根と茎の間を尖ったハサミで切ります（抜きません）。それでどんな植相が変わりました。

(3)捕食動物を寄せ付けない方策を考える——そのために中村浩志・信州大学名誉教授はケージ保

護をやっています。1ヶ月ぐらいの間、2交代制6人で6羽ぐらいを育てます。親子のそばにいて見守る、とても大変な作業ですが、すばらしい活動です。

別の方法としては、超音波でテナ類を駆除する装置をライチョウの巢のそばに置くものもあります。しかし、ライチョウは雛を連れて遠出するので、前述のケージ保護と併用すると効果があるでしょう。

(4)動くデコイを試してみたい——もう一つやってみたいことがあります。私たちの目もそうですが、チョウゲンボウなどの目も動く物を見付けます。だから、動くデコイで彼らの目をそちらに誘導するので。それを作りましたが、これの効果を現場で監視する作業を手伝ってもらえませんか。

*

私たちは、ライチョウを増やすために、研究者の研究結果を活かしながら、身体でライチョウを守る活動をしたいです。JACが山の自然に貢献できるチャンスであり、登山者の責務でもあると考えます。賛同してくださる方は、
☒ zero@qb3so-net.ne.jp 大森宛
ご連絡ください。

追

OBITUARY

悼

中井支部長を偲ぶ

谷野 彪

中井支部長は霊峰大山の麓に誕生され、小さいときから自然豊かな環境の中で成長された。中井さんの旧姓である「王身代」という苗字は、後醍醐天皇が隠岐の島から脱出し船上に立てこもったとき、王の身代わりになった功績でこの名が付けられたと言い伝えられており、名家である。

1961(昭和36)年4月、高校入学と同時に山岳部に入部、春山から夏山、冬山合宿と精進し、登



中井(旧姓・王身代)俊一

(なかい・しゅんいち)会員番号9772

- 1944年 鳥取県西伯郡大山町生まれ
- 1961年 鳥取県立米子南高校に入学、山岳部に入部
- 1964年 東京農業大学入学とともに山岳部に入部、冬期の中部日高山脈縦走や北鎌尾根～槍ヶ岳などの記録を残す
- 1985年 日本山会入会。紹介者は佐藤衛士、港叶会員
- 1999年 山陰支部創立50周年記念メラ・ピーク登山隊に参加
- 2009年 60周年記念で台湾・玉山へ
- 2001～03年 日本山岳会評議員
- 2012～20年 日本山岳会山陰支部長
- 2019年12月15日 逝去、享年76

山の基礎を学んでいる。夏山は北アルプス縦走、冬山はOBたちの船上山から大山縦走のサポート隊を務めた。谷川岳にも遠征しており、上越の山を十分に堪能した後、単独で尾瀬にも行かれている。良き顧問の先生にも恵まれ、充実した3年間の高校生活だった。

1964(昭和39)年4月、東京農業大学入学とともに農友会山岳部に入部。66年の冬山合宿では、後立山連峰縦走および爺ヶ岳・東尾根から極地法で針ノ木岳に登っている。このとき、私たちも赤岩尾根から鹿島槍ヶ岳の合宿だったが、

猛吹雪のため敗退している。同じように中井さんたちも東尾根で身動きができなかったわけで、後日、酒を酌み交わしながらお互いに語ったことが、昨日のこのように思い出される。

大学卒業後は、郷里の米子市役所に就職している。

「中井さんは米子市役所の先輩で、在職中は同じ山の愛好家でありながら、私は『米子市役所山の会』に所属していました。我々は大山寺の遭難対策小屋の掃除や換気を兼ねて、寝泊まりしながら大山を中心に活動していましたが、中井さんはすでに日本山岳会の会員だと聞いており、私と違って全国版だなあと、一目置く存在でした。その後、定年の3年前に日本山岳会に誘われ、入会しました。高田、白根、そして中井支部長の途中まで、3代にわたって支部長の下で事務局長を務めることになりましたが、その間、一緒に随分たくさん山に登りました。

中井さんは毎朝夕、皆生海岸(かひけ)を歩き、足腰を鍛えていました。ゆつくりと確実にマイペースで登られる姿勢は、知り合ってから入院されるまでの間、変わることはあ

りませんでした。一時的な入院だと思っていました。突然の訃報に接しても、天国から「伊澤、何しとうだ!」と叱られているような気がします。ただただ中井先輩が懐かしく思われます。」と伊澤寿高会員は語る。

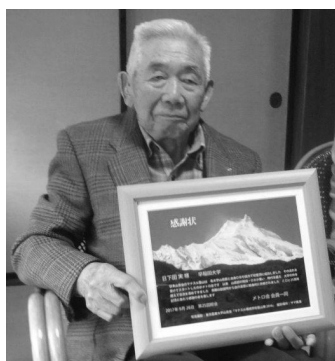
晩年の登山は2018(平成30)年3月、国宝の投入堂(なげいれ)で有名な霊峰三徳山(みとくさん)を神倉集落から登るため支部長以下3名で出かけたものの、昼前まで別の山に登っていたため、三徳山は途中で時間切れとなり下山した。二度目は12月16日、中井支部長とふたりで同ルートを行くが、思わぬ降雪と積雪があり、時間内に山頂に到達できないと判断し再び退却する。三度目の正直とはよく言ったもので、翌年4月に4名で出発、木々とクマザサに覆われた山頂に立つことができた。『雲伯百山』(仮称)を出版するための登山で、一緒に登山したのはこれが最後であった。

数年前から体調があまり良くなく、昨年8月から入院を繰り返していたという。12月15日、奥様から訃報を聞きすぐ駆け付けたが、実に穏やかな顔だった。

生者必滅 会者定離

日下田實先輩を偲んで

浜崎一成



日下田實（ひげた・みのる）

会員番号4146

1930年 栃木県芳賀郡益子町生まれ
1948年 早稲田大学専門部政治経済
学科入学、山岳部に入部
1952年 アコンカグア遠征隊に参加
1954年3月 早稲田大学政治経済学部
卒業。日本山岳会第2次マナ
スル登山隊隊員
1956年 同第3次登山隊隊員として同
峰に登頂。毎日新聞社入社
（～1958年）
1959～1963年 日本山岳会理事
1987～1991年 日本山岳会評議員
1996～1999年 栃木県教育委員長
2007～2010年 日本山岳会栃木支部長
2020年1月18日 逝去、享年89

前・戦後の歴史をつなぐ大きな変
動の最中にあったのである。

終戦と同時に山岳部は活動を再

開、「1日でも早く復活したい」と
いう部員たちの気持ちは熱く、1
946（昭和21）年度末には、前穂・
北尾根から極地法による前穂登頂、
引き続き47年末には、冬のペテ
ガリ岳遠征を果たしている。その
後が、日下田先輩が現役部員とし
て活躍した時代である。

当時の合宿を振り返ると、テン
ト、ザイルなど登山用具類はすべ
て戦前から使われていたもの。そ
のうえ食糧はナマものを合宿に持
ち込んで食事の都度料理するわけ
で、米などは半ナマ状態であった。
トランシーバーや携帯電話など連
絡手段もない。今の合宿に比べれ
ば「不便極まりない」の一言に尽き
るが、どの合宿も登山目標を達成

しようと意気込みは高く、充実感
があった。残された最大の課題は、

世の中が戦後の混乱期を脱しつつ
ある状況下で、「本来の学生登山は
いかにあるべきか」を追求すること
にあった。そうした時代の中で、日
下田先輩の存在は際立っていた。

学生登山は、あくまでも4年と
いう期限の枠内でのチームプレー
だ。年度ごとにリーダーシップの
確立、2・3年生の強化、新人の
育成を踏まえて、その年度のチー
ムプレーの成果を穂高や剣の春山
合宿で問う。早々と他界された同
期の小倉茂暉（日本山岳会元副会
長）、塚本茂樹（同元信濃支部長）両
先輩を加えた3人のコンビネーシ
ョンは、特段に光っていた。

彼らは戦後の早大山岳部復活を
仕上げ、新しいカラーを創り上げ
た。とりわけ、国内の大学山岳部
の中にあつて、早稲田をトップレ
ベルに押し上げたという成果は象
徴的である。そして、山岳部の歴
史において、新しい理念を構築し、
次世代につなげる重要な役割を果
たされたと言える。

日下田先輩は、在学中に南米・
アコンカグア登山隊（関根吉郎隊
長以下6名）に参加し、1953

（昭和28）年1月、全員登頂を果た
した。戦後初の海外登山の成功だ
った。その後、第2次隊に引き続

き1956年、日本山岳会第3次
マナスル登山隊（横有恒隊長）に参
加、第2次のアタック隊員として
5月11日、8163m（当時は81
56m）の山頂に立った。日本人と
して初めての8000m峰、しか
も世界に先駆けての初登頂という
快挙で、その功績が認められ20
10（平成22）年4月、早稲田大学
スポーツ功労者表彰を受けた。

今年は早大山岳部創部百周年で
あり、11月に祝賀行事を予定して
いる。日下田先輩はこの100年
の歴史における象徴的存在であり、
我々後輩としては元氣な姿で参加
されることを期待していた。それ
だけに残念でならない。

日下田先輩は晩年、郷里の栃木
県で県教育委員会委員長という重
責を担われるなど、生まれ故郷で
も公務的な面で活躍をされておら
れた。しかしご本人は、いつも「山
の仲間と一緒にいる」ということ
を心の糧として、誇りある人生を
全うされたものと思う。そういう
人柄だった。

安らかに眠りください。

図書受入報告(2020年2月)

著 者	書 名	頁/サイズ	発 行 者	発行年	寄贈/購入別
わらじの仲間(編)	わらじの仲間創立60周年記念誌	28P/26cm	わらじの仲間	2018	発行者寄贈
天野和明(監修)	ヤマケイ登山学校 / 雪山登山	152p/26cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
芳須勲(監修)	ヤマケイ登山学校 / 登山ボディ	144p/26cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
今井寛	スケッチの山旅 (Yamakei Creative Selection Pioneer Books)	273/15cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
岩崎元郎	岩崎元郎の地球を遠足	271p/19cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
角幡唯介	極夜の探検(月刊「たぐさんのふしぎ」2020年2月号)	44p/25cm	福音館書店	2020	出版社寄贈
高山龍三	河口慧海 : 雲と水との旅をするなり	380p/20cm	ミネルヴァ書房	2020	出版社寄贈
平井一正(制作)	山・作物研究・アフリカ : 追悼 高村泰雄	154p/21cm	土倉事務所	2019	制作者寄贈
山崎幸和	弥彦神社各地分布の謎 : 全国47分社探訪記	494p/21cm	新潟日報事業社	2018	著者寄贈
角幡唯介	エベレストには登らない : Never Climb Mt. Everest	272p/19cm	小学館	2019	出版社寄贈
高見沢賢司	那須岳と白山を結ぶ中央分水嶺を歩く	280p/30cm	信濃毎日新聞社	2019	著者寄贈
若菜晃子	街と山のあいだ	283p/18cm	KTC中央出版	2019	著者寄贈
若菜晃子	旅の断片	320p/18cm	KTC中央出版	2019	著者寄贈
樋口一郎	鎌倉&三浦半島 山から海へ30コース(改訂版)	160p/21cm	東京新聞	2019	出版社寄贈
Fowler, Mick	No Easy Way Mick Fowler	241p/24cm	Vertebrate	2018	購入
Echevarria, Evelio A.	The Andes	827p/28cm	Joseph Reidhead	2018	購入

☆上記の他に、高澤光雄氏より『網走山岳会 創立50周年記念(会報 第3号、2012年刊)』等、計9部の団体記念誌及びバックナンバーをご寄贈頂きました。



「クライマーズ・ブック」上高地ルミエスタホテルにて2014年9月20日撮影

N — 東北 — S — 南北 —

5年目の「山の日」に 寄せて

牛丸工

平成28(2016)年8月11日が「山の日」に制定され、第1回の記念式典が長野県・上高地で開催されてから、時代は平成から令和となり、今年で5年目となる。

「海の日」があつて「山の日」のないのはいかなものか、と多くの意見があつたため、8月11日が「山の日」に制定され、式典を長野県・上高地で開催する、と「全国『山の日』協議会」が発表したのは平成27年5月22日であつた。この決定を耳にし、多くの来賓が上高地を訪

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

れることを考え、私は個人的に来賓者の記念品に「クライマーズ・ブックの全訳」が閃いた。

ご存じのように、かのウォルター・ウエストンは3回目の来日を

終え、日本を去る前年の大正3年8月に4回目となる上高地に滞在し、8月24日に上高地温泉場を後にして、案内人・内野常次郎を伴い夫人と一緒に白骨温泉に向かった。温泉場を立つ際、温泉場の責任者・加藤惣吉に1冊のノートを手渡した。それが「クライマーズ・ブック」と呼ばれている。当時は外国人向けの登山案内書があまりないので、温泉場を訪れた外国人登山者が山の情報を書き込むためのもので、最初の6ページにはウエストン直筆で、次に来る登山者への思いが込められている。

「クライマーズ・ブック」はかつて全訳されたことがなく、その存在を知る人はわずかしかなかったが、

なんとかこの機会に全訳出版してみたいものだ、と考え、信濃毎日新聞社に相談した。即「面白いから、やろうではないか」という返事があつた。ただ、当初は復刻本と全訳本の2冊セットを考えていたが、費用が掛かり過ぎるし予算もないので、記念品と一般販売の両方で、という方向になった。

また、信濃毎日新聞社では「クライマーズ・ブック」という存在を初めて知ったことでもあり、全訳して来賓に記念品とするほど価値があるものか疑問であつたので、私は、この本の重要性和貴重品であることの資料を作成した。まず、最初の6ページは本場にウエストン直筆であるか、筆跡を見比べた。ネット上で集めることができた日本山岳会、大町山岳博物館、信州大学小谷コレクション、松本市立博物館の4館に所蔵されているウエストンの筆跡をすべて集めて比較検証し、これが間違いなくウエストンの筆跡であることを確認した。最初の6ページだけでも、博物館級の価値がある。

さらに日本人登山家で日本山岳会を設立した7人のうちのひとり、初代日本山岳会会長・小島鳥水の

英文が1ページにわたり記述されているのも見付けた。昭和4年6月22日と23日、松本市主催で東京日本橋三越で「日本アルプス博覧会」の催しがあり、そこに「クライマーズ・ブック」が展示されていた。会場を訪れ、その存在を初めて知った小島鳥水は2週間後に上高地温泉場に行き、英文で記述することになったわけで、小島鳥水直筆の英文の記述もある。

登山関係者だけでなく、火山・地震学者が読んだら、研究に役立てることが出来る記述もあつた。Jerome Dean Davisは新島襄と一緒に同志社大学を設立した人物として知られているが、その息子「Merle Davis」は大正4年6月6日の焼岳噴火を目の当たりに見て、詳細な記述を残している。これらの資料を基に信濃毎日新聞社では実行委員会を立ち上げ、各団体に声を掛けて資金を拠出することになり、出版・販売に至り「山の日記念式典」の来賓者への記念品となつたのだつた。

この本記述の山行と写真が一致するものを、今のところ2つ見付けた。一つは前述J. Merle Davisが大正池出現直後に撮影した写真

年会費の預金口座振替のお知らせ

会費の支払いを預金口座から自動引き落としにされた会員と準会員の方々、2020年度の会費、準会員会費は、4月27日にご指定の預金口座から引き落としさせていただきます。ご自身の預金口座残高のご確認をお願い申し上げます。

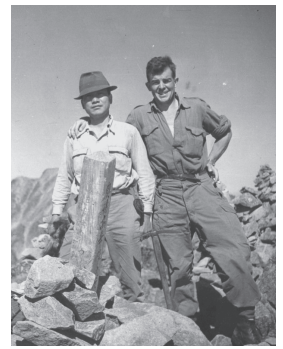
まだ会費を預金口座からの自動引き落としにされていない会員の方には、毎年の会費の振り込み忘れを防ぐために、預金口座振替の手続きを進められるようお願い申し上げます。手続きのための届け出用紙を紛失された方は、本部事務局までご連絡ください。

寄附金および助成金などの受入報告

(令和2年2月29日まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
株式会社 センコー技研 代表取締役 竹中 佳美 様	100	岐阜支部が行なう県 有林整備事業・登山 振興事業費用
重廣 恒夫 会員	1,000	グレート・ヒマラヤ・トラ パス第1回費用

6枚と、もう一つが、私の父牛丸福美が昭和28年9月10日に英国陸軍医療部隊大尉マイケル・アッシュクロフトを案内して奥穂高山頂で撮影された写真が我が家に遺されていた。G.S. Phelpsの回想の記述の中に出てくる、明治36年8月の外国人5人による槍ヶ岳肩まで



英国陸軍医療部隊大尉マイケル・アッシュクロフトと牛丸福美

の登山で撮影された、9枚の写真が現存することも突き止めることができた。5人とは大阪のGeorge Gleason、東京のGalen M. Fisher、京都のG.S. Phelps、東京の立教学院(現在の立教大学) 総理St. George Tucker、東京聖路加病院長創設者 Dr. Rudolf B. Teuslerであった。

でき上がった本を手にとって読んでみると、今まで登山史に登場しなかった外国人による登山の一端を垣間見ることができる。このことは、これからの登山史の研究対象となるであろう。

『炉辺山話』と山の画人・武井真澄について

小原茂延

角川ソフィア文庫に入った『本屋風情』を読み出して、著者の岡茂雄が書いた平凡社ライブラリーの新編『炉辺山話』を買っているが、何年もツンツン読であったのを思い出した。目次を確認すると山岳画家についての随筆が幾つかあるのに驚いた。関係する委員会にいたので、その人物像や作品に接していたが、岡茂雄と結び付かず「灯台下暗し」を地味にいつてしまった。山の画人として武井真澄と茨木猪之吉との関わりが収録されている(元々は『炉辺山話』に武井真澄、『閑居漫筆』に茨木猪之吉を書いている)。

岡茂雄は長野県松本の出身で、出版の『三茂雄』として、岩波茂雄、反町茂雄とともに知られているが、異色の経歴である。幼年学校、陸軍士官学校を出て、1920年、陸軍中尉から軍籍を離れ、人類学を志す。柳田国男、浜田青陵らの知遇を受けた後、「岡書院」を設立して雑誌『ドルメン』を創刊、一方で

山岳書の梓書房を起こしている。

さて、『炉辺山話』の第一部「落穂」の中に山の画人武井真澄が登場するが、武井真澄は岡茂雄の松本中学校時代の先生であったと、その関係を詳らかにしている。信州諏訪の生まれで、東京美術学校の鍔金科に学び、松本で教職に就いていたのである。岡が語るには、戸隠あたりを歩き回って山に憑かれた武井真澄(本名 真澄)は、美校卒業と同時に鍔金と訣別し、小山正太郎の塾で水彩や油彩画を学んでいたが、日本画に再転じて児玉果亭に学び、その後、上京して寺崎廣業の門に入っている。

日本山岳会との縁は、明治38、39年ごろに上高地の清水家で三枝守博と出会い、その紹介で小島烏水や山岳会創立時のメンバーと交友が始まっている。山岳会初期の会章図案は、武井真澄によることも知られている。しかし、中央画壇からは遠ざかっており、岡茂雄は松本中学時代に武井先生を大いに私淑していたので、画伯をもう一度振り返って見てもいいのでは、願いから、昭和9年7月に同郷の先輩である岩波茂雄と謀り、銀座・伊東屋で武井真澄山岳画展を開催

山研の利用要領が変わります

山岳研究所(以下「山研」)の利用実態、財務状況を鑑み、令和2年度より、利用要領を変更いたします。要領の変更および要旨は下記のとおりです。

記

- 会員外の利用料金が1000円増額(会員・会員外の料金差が従前の1000円から2000円に変更)。
- 団体料金の適用は、従前の10名から15名へ。
- これまで曖昧だった会員の「家族」の範囲を「生計を一にする同居者」と明記。
- 一方で、開所期間は11月初旬まで延長し、会員の皆様がさらに利用しやすくなるよう、努めてまいります。

詳細は、JACホームページ内の利用要領をご覧ください、山研委員会にお問合せください。

JAC HP (<http://www.jac.or.jp/info/iinkai/sanken/manual.htm>)
山研委員会 ☐ (sanken@po.mcci.or.jp)

これを機にぜひご家族・ご友人へJAC入会を勧めていただければ山研委員会一同嬉しく思います。ご理解のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

なお、開所は4月26日、ご利用は27日からを予定しています。今シーズンも、多くの皆さまのご来所をお待ちしています。

し、そのころの岳界の人たちに紹介の労をとったという。

当時の美術学校教授で彫金界最高の権威であった清水亀蔵は、果たして旧友武井なのかと学生を寄越して確かめた上、不自由な足を運び「よく武井を引っ張り出してこのような催しをしてくれた」と岡茂雄の手を固く握って感謝したそう、その友情の激しさに目頭

が熱くなった、と述懐している。

武井真澄は昭和11年の日本山岳画協会の創立にも参加している。日本山岳会の会報55号に中村清太郎が創立に就いて報告しており、「……日本山岳会とは一面正に同胞の會と申すべきものであり、同會員諸賢の親愛を希ふ次第……」とその縁を述べ、顧問として小島烏水と藤木九三を迎え入れている。

同協会は本年創立84年を迎え、毎年各地で展示会を開催しているが、創立時の本会との同胞的関係を大事にしたいものである。平成28年に山口県立美術館と松本市美術館で「遙かなる山」発見された

風景美展」が開催されたが、武井真澄の大正8年作「雲海朝陽図」は、燕岳から槍ヶ岳を望んだ見事なものであった。写真も得意で、大空に翔けるライチョウを捉えた希少な傑作もある。



北海道大学スキー部編
北海道大学スキー部100年・山スキー部50年記念誌



2019年3月
北大山とスキーの会
A4判426頁

北海道大学スキー部の100年が凝縮した1冊。スキー部の設立から山スキー部の分離経緯、活動記録、合宿の思い出、山の歌、海外遠征や山行記録、仲間への追想、

避けては通れない遭難記録や追悼集、長年の伝統の蓄積が1冊にまとめられている。とにかく内容が豊富。関係者の寄稿により構成されているが、どこに焦点を当てて紹介文を書いてよいか困った。

1912年から始まる北海道大学スキー部の歴史は、日本におけるスキーの歴史と言っても過言ではない。創部当初は、1本杖のリリエンフェルト式スキー術であったと記載がある。

数多くの記載内容から札幌の地の利を活かしたヒュッテンケッケ構想に触れたい。ヒュッテンケッケとはドイツ語で山小屋の連鎖を意味し、定山溪を中心とした札幌西部の山々に点々と山小屋を建設し、小屋を巡ってスキーツアーを楽しむというものである。

札幌西方には1000mから1500mの山々が連なっている。そこにはかつて23棟の山小屋があり、現在でも改築、移転も含め9棟が健在だ。また、そのうち5棟（パラダイスヒュッテ、奥手稲山の家、ヘルヴェチア・ヒュッテ、無意根小屋、空沼小屋）が北海道大学の所有となっている。

ヒュッテ建設の歴史は古く、多

くは1920年代から30年代に建てられている。このように多くの小屋が建てられたのは、北海道大学にスキーを紹介したハンス・コラー先生を始め、北海道大学スキー部や山岳部の努力と協力の賜であつたことが、本書で報告されている。

私事で恐縮ではあるが、一昨年大学の小屋をお借りし、山スキーをしたことがある。一度踏み入れた札幌の大地に魅了され、この地においてスキーが発展し、根付く条件がそろっていることを実感した。頂に立ち、眼下に広がる山々を前にしたとき、この地を滑つてみたいという衝動に駆られたことを覚えている。

また、100周年記念行事としてOB、現役のリレー形式でヒュッテンケッケ・スキーツアーを実施している。先人の思い描いた構想が現在においても引き継がれていることの証である。

本書はA4判で400ページを超える。これだけの大作を刊行した関係者の方々は、並々ならぬご苦労があつたものと察する。編集された方々には敬意を表する。

(廣岡正敏)

群馬県山岳団体連絡協議会編 群馬の山歩きベストガイド



2019年12月
上毛新聞社事業局出版部
A5スリム判268頁
1400円＋税

本書は、群馬県内の山をよく知る「群馬県山岳団体連絡協議会」(群馬県山岳連盟、群馬県勤労者山岳連盟、日本山岳会群馬支部の3団体で構成。八木原圓明会長)の会員が総力を挙げて全コースを歩き直し、取材・編纂した最新のガイドブックである。

20年近くも県内外のハイカーに親しまれ、21刷も版を重ねた『群馬の山歩き130選』(平成2年初版)をベースに全面的に見直し、3団体に所属する60名のメンバーが「安心して登れる126コース」を調査し、執筆・編集に当たった労作だけに、利用価値は高いと言える。なお、本会群馬支部は尾瀬、赤城、四阿、野反湖周辺などを担当している。

全体構成は、「谷川・三国・武尊」「尾瀬・奥日光」「赤城・足尾・

『山の日マガジン2020』を発行

「山の日」が国民の祝日になってから今年で5年目を迎える。山や里山、森などの自然と人との関わりを見詰め直す冊子として発行されている『山の日』マガジンの第3号、2020年版が4月に発行される。

日本山岳会も主要な会員となっている一般財団法人・全国山の日協議会が協賛スポンサーや関係省庁、自治体などの協力で作ったフリーペーパー(無料配布)。40ページ。5万部を全国で配布するが、当会会員には会報「山」4月号に同封してお届けする。

今号は、第5回「山の日」記念全国大会が大分県(くじゅう連山)で開催されるのにちなんで、九州の山々と自然を特集した。元熊本支部長で阿蘇山麓に住む工藤文昭さんが火の山、神話の山など九州の山の魅力を紹介している。

令和元年度第9回(2月度)理事会
議事録日時 令和2年2月12日(水)19時00分
分 22時00分

東毛」「吾妻・子持・小野子」「浅間・白根」「妙義・榛名」「西上州」の7つのエリアに分けられており、谷川岳や上州武尊山、尾瀬など著名な山は、複数のコースが紹介されている。また、2018年夏から運用され始めたロングトレイル「ぐんま県稜線トレイル」の主要コースも掲載されている。

近年の山岳遭難の増加は、「登りたい山」と「登れる山」とのミスマッチがその主原因となっていると言われる。その対策として考えられたのが「山のグレーディング化」である。長野県を筆頭に、いわゆる「山岳県」でこのグレーディング化が進んでおり、本県でも2017年に群馬県と群馬県山岳団体連絡協議会が「群馬県・山のグレーディング」を作成している。

本書も、そのグレーディングに準拠している。「体力度」が1から10まで(本書では6まで)で表示され、「難易度」がAからEまで(本書ではDまで)で表わされているので、自分の体力と技術力に見合った山を選ぶのに、格好の指標となることだろう。

ただ、定価を安く抑えたかったせいであるが、本文が1色刷りである。せっかくこれだけの組織力をもって、すべて現地踏査したのであれば、せめてカット写真はカラーで見えたかと思う読者が多いのではないだろうか。当然、地図も見やすくなったと思われるので、残念でならない。重版時のカラー化に期待したい。

(節田重節)

場所 集会室

【出席者】古野会長、野澤・山本・坂井各副会長、永田・萩原・古川各常務理事、安井・清

登・清水・飯田・柏・近藤・波多野各理事、黒川・石川各監事

各監事

【欠席者】神尾理事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

- 1・100万円以上の寄附金の受入2件について審議した。(賛成14名、反対なしで承認)(古川)
- 2・上高地山岳研究所管理規定の改正、利用料金の引き上げについて審議した。(賛成14名、反対なしで承認)(安井)

【協議事項】

- 1・令和元年度後期・海外登山助成金の申請登山隊について協議。次回理事会で引き続き協議することになった。(坂井)
- 2・120周年記念事業の管理ガイドライン案について協議し、ガイドラインを施行することになった。(古川)
- 3・120周年記念事業募金開始について協議し、周辺環境が整い

次第開始することになった。(飯田)

4・障がい者入会に関する入会条件の緩和について協議し、各支部に意見を募ることになった。(古野)

【報告事項】

- 1・波多野理事の退任について報告があった。(古野)
- 2・43人の正会員と19人の準会員の入会を承認した旨、報告があった。(古野)
- 3・寄附金・助成金の受入について報告があった。(古川)
- 4・上高地山岳研究所の利用要綱について改正した旨、報告があった。(安井)
- 5・上高地山岳研究所管理人の雇用通知について報告があった。(安井)
- 6・上高地山岳研究所管理人の防火管理者講習の受講について報告があった。(安井)
- 7・YOUTH CLUB委員長交代につき、中山茂樹会員が就任した報告があった。(野澤)
- 8・グレート・ヒマラヤ・トラバースの実施について報告した。(飯田)

ル ーム 日 誌 2月

9・ヒマラヤ・キャンプの実施、寄附金を独自の経路でも募ること、撮影隊の同行について報告があった。(相)

10・損害保険ジャパン日本興亜との契約における特約条項の追加について報告があった。(永田)

11・年次晩餐会の収支報告があった。(永田)

12・カシオの販売実績について報告があった。(永田)

13・「雪崩サーチ&レスキュー講習会basic」の後援名義を使用する報告があった。(萩原)

14・後援会「雪崩から身を守るために2020」の後援名義を使用する報告があった。(萩原)

15・日本山岳ガイド協会「百万人の山と自然「安全のための知識と技術 公開講座」」の後援名義を使用する報告があった。(萩原)

16・英国山岳会のウェストン祭への訪問について報告があった。(古野)

17・日本山岳会マークの許可申請があった旨、報告があった。(古野)

18・会報「山」2月号の発行について報告があった。(節田)

3日	総務委員会 記念事業委員会 YOUTH CLUB スキークラブ
4日	常務理事会 スケッチクラブ
5日	図書委員会 山行委員会 YOUTH CLUB YOUTH CLUB
6日	YOUTH CLUB 山岳地理クラブ
7日	二火会 フォトクラブ
10日	スケッチクラブ
12日	理事会 山想倶楽部
13日	山岳研究所運営委員会 科学委員会 遭難対策委員会 会九五会
14日	記念事業委員会
15日	山の自然学研究会
17日	総務委員会 資料映像委員会 00会
18日	スキークラブ 里山歴史研究会 バックカントリークラブ
19日	三水会 フォトクラブ 休山会 つくも会 マウンテンカルチャークラブ
20日	科学委員会 会報編集委員会 みちのり山の会 緑爽会
21日	自然保護委員会

25日	デジタルメディア委員会 緑爽会 平日クラブ
26日	家族登山普及委員会 支部事業委員会
27日	公益法人運営委員会 学生部 01会 山遊会
28日	記念事業委員会 総務委員会 2月来室者 434名
会員異動	
物故	
小野徳太郎(5592)	20・1・31
小島守夫(6189)	20・2・12
本田昌司(6915)	19・12
溝部忠増(11977)	不明
若月 昇(12430)	20・1・31
登 三郎(14138)	20・1・1

◆新緑や花と歴史を訪ねる佐渡の山旅のご案内
山行委員会
ゆったり行程で、新緑と満開の

インフォメーション

野草を愛する大佐渡山脈の山旅と、豊かな歴史の島を楽しみませんか。
日程 5月25日(月)～28日(木)
費用 4万7000円(佐渡汽船

退会	
高嶺ぐるーぷ(4283)	越後
高嶋徳紘(9626)	埼玉
田代妙子(10484)	京都・滋賀
高橋 隆一(11913)	千葉
菅原恒男(12524)	山形
奈尾行雄(13464)	
松田雄介(13909)	
原田榮作(14213)	熊本
藤本稔子(15098)	東海
岩本裕子(15690)	
前田裕介(16283)	
辨谷智菜美(16348)	石川
平栗崇之(16014)	
梶野光永(16057)	宮城
澤野林太郎(16112)	
前田明代(16143)	

および現地交通費、通信費、保険料、宿泊費、懇親会費を含む)

集合・解散 上越新幹線新潟駅
募集 15名

申込み 4月25日までに会員番号、

住所、氏名、電話、緊急連絡先等を明記し、上村紀子まで。〒272-0023

千葉県市川市南八幡4-18-1806

☎047-377-9203

✉sanho@jac.or.jp

*参加申込み者には別途、詳細案内をお送りいたします。

◆第24回久弥祭開催のお知らせ

石川支部

山の文化とその精神を広く多くの人たちに伝えた深田久弥。その功績と人となりを広く後世に伝えるとともに、山と人々の生活との深い関わりを知り、その思想の普及を図り、岳人そのほかの関係者の交流の輪を広げることを目指します(令和2年度「山の日」関連事業)。

日時 4月26日(日) 午前8時から
場所 九谷ダム広場(富士写ヶ岳登山口 加賀市山中温泉)

枯淵町)

実施

久弥祭実行委員会、山中山岳会、加賀山岳会、加賀ハ

イキングクラブ、石川県勤労者山岳連盟、公益社団法人日本山岳会石川支部、N

PO法人深田久弥と山の文化を愛する会

式典

午前8時〜8時30分

主催代表挨拶、来賓挨拶、献花、献酒、献句、朗読

登山

シャクナゲ咲く富士写ヶ岳への登山(希望者)

ゆかりの地めぐり 深田久弥のゆかりの地めぐり 午前10

時 深田久弥の文化館集合

参加費 無料

照会・連絡先 加賀市深田久弥山の文化館 加賀市大聖寺

町18-2

☎076-172-3313

✉yamabun@mail2.kagacable.ne.jp

*参加者に記念の粗品進呈

◆2つの展覧会のご案内

菅沼満子

ザックに絵の道具を入れて山旅を続けている菅沼満子(アルパインスケッチクラブ会員)です。春から初夏にかけて2つの展覧会を開

催します。

故菅沼嘉弘・すがぬまみつこ

二人展

油絵と水彩画それぞれ20点ずつ展示。

期間 4月30日(木)〜5月5日(火)
場所 コートギャラリー国立 国立市中1-8-32

☎042-573-8282

2日(土)午後3時〜3時半にオカリナ・コンサートあり。

絵と文Ⅱすがぬまみつこ『まきばへ』(本作り空刊) 絵本原画展

美しいまきばの季節と子どもたちを描いた絵本ができました。ハ

ヶ岳南麓のまきばのスケッチから生まれた絵本ですが、出版を記念して原画を展示します。

期間 5月20日(木)〜6月1日(月)

場所 青猫書房 東京都北区赤羽

2-28-8

☎03-3901-4080



「カツオー・ラ(峠)の羊飼い」

◆編集後記◆

●中村みつを会員の「超低山」の記事はいかがでしたか。ところで、「日本一低い山」は、大阪市港区の天保山(4・53m)という築山だと言われてきました。しかし、天保山以前に日本一と言われていた仙台市宮城野区の日和山(6・05m)が東日本大震災で地盤沈下、2014年、3mの築山として日本一に返り咲いたのです。

●先年、四国支部の皆さんの案内で徳島市方上町の弁天山(6・07m)に「登頂」しましたが、こちらは「国土地理院認定・日本一低い自然の山」を謳っています。弁天山保存会があり、登頂証明書を発行、山頂の厳島神社のお守りまで売っています。いまだかつてこの山で遭難はないので、安全登山のご利益は灼かとか。(節田重節)

日本山岳会報 山 898号

2020年(令和2年)3月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野 淳
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社